

川崎大師教學研究所紀要・第10号抜刷
令和七年三月二十一日発行
川崎大師教學研究所

法崇述『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』訳注(四)

佐々木大樹

法崇述『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』訳注(四)

佐々木大樹

はじめに

本論では、前号に引き続き、法崇述『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』（大正蔵一八〇三番、法崇疏）について訳注を行う。前号では、①教起因縁分の証信序のうち（※拙論訳注(一)末のシノプシス表参照）、第五の処成就までを終えたので、今号では、第六の衆成就から始め、教起因縁分末までの訳注を行いたい。その訳注を行う過程で、法崇疏が参照したであろう経論をめぐって、いくつかの注意すべき傾向が看取されたので、以下二点を付記しておきたい。

まず、衆成就「千二百五十人」の注釈については、問答部分を含めて、『金剛般若経疏』（大正蔵二七四一番）と対応することが判明した。『金剛般若経疏』とは、敦煌出土の Pelliot. 二二二〇番を原本とする著者不明の注釈書とされる¹。法崇疏では、『金剛般若経疏』について言及せず、また引用の体裁を取らない

ものの、「千二百五十人」から「標初会所度故無余也」までの二五三字分は、使用される術語も含めて、ほぼ『金剛般若經疏』と一致している。² 前の拙論においても、『金剛般若經疏』との対応箇所が見受けられたことから、法崇疏の成立をめぐって少なからず『金剛般若經疏』との影響関係が想定される。今後、『金剛般若經疏』との関係性にも注視しながら、法崇疏の読解と分析を進めていきたい。

次に、法崇疏は、仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』（大正蔵九六七番）の注釈書であるが、その解釈を補強するために、地婆訶羅訳を援用していることが判明した。地婆訶羅には、『仏頂最勝陀羅尼經』（大正蔵九六九番）、『最勝仏頂陀羅尼淨除業障呪經』（大正蔵九七〇番）という二訳が現存するが、そのいずれもが本論の範囲中で用いられていた（本論の注³³と注⁹³参照）。前訳本の素性は、比較的明らかなのに対し、後訳本には、他訳に類を見ない記述が増広され、訳出状況についても不詳な部分が多いものである⁴が、法崇疏では後訳本の内容を次のように取意引用していた⁵。

初に畜生を受く。第二に地獄の苦を受く。第三に人身を受く。第四に貧賤に生じ、胎に処すとも兩目無きなり。若し広く**因縁**を説かんと欲せば、**婆羅門有りて、善住の過去の因中、母に於て瞋を起して報を得たりと述ぶ**。別に抄記するが如し。⁶

引用中では、善住天子が死後、畜生・地獄等の身を受ける原因として、過去世で母に瞋心を起こしたことを挙げているが、このような因縁に唯一言及するのが地婆訶羅の後訳本、すなわち『最勝仏頂陀羅尼淨除業障呪經』なのである。⁷ 本疏の撰述にあたり法崇は、仏頂尊勝陀羅尼に関わる諸訳・類本をどれ

ほど参照したのか、その実態を示すものとして興味深いものといえよう。

法宗述『仏頂尊勝陀羅尼經教述義記』訳注

(高基本・上巻三三丁左、『正統藏經』三七卷一九〇丁左、『大正藏』三九卷一〇二〇頁中段)

【①——六 衆成就】 經に曰く、「与大苾芻衆千二百五十人俱(大苾芻衆千二百五十人と俱なりき)」とは、述して曰く、次

に第六の衆成就に當つ。亦た三種有り。一に声聞衆を顕し、二に菩薩衆を顕し、三に諸天衆を顕す。

且く第一に声聞衆とは、即ち「大苾芻衆千二百五十人と俱なりき」という是れなり。今は先に声聞を顕し、後に菩薩を彰す。「与」と言うは、自を以て彼を兼ねるが故に、言いて「与」と為す。

「大」と言うは、群を抜きて衆に超えたるが為の故に、言いて「大」と為す。又、「大」と言うは、梵に「摩訶」と云う。摩訶は、此れ(正統藏本一九一左)大と言うなり。三藏の義を具す。一に大、二に多、三に勝なり。

「大」と言うは、小声聞に非ず。天王・人王・大人の為に供養する所なり。又、八義の故に「大」と名づく。一は数大、千二百等なり。二は名大、名称の遠く聞こえればなり。三は徳大、大阿(高基本・上巻三四丁右)羅

漢の故なり。四は離大、大障礙を断ずるが故なり。五は性大、功德智慧波羅蜜多の種性の故なり。六は識大の故に、大人所識の故なり。七は趣大、大菩提に廻向するが故なり。八は敵大、能く外道を破するが故なり。多と言ひ、勝と言うは、八義を具すればなり。

文中に「苾芻」と言うは、其れに三義有り。一に怖魔、二に乞士、三に破惡なり。怖魔と言うは、出

家を為す時、上、魔宮を動じ、下、群品を利す。魔怖を以ての故に。故に怖魔と名づく。

乞士⁹と言うは、四邪命¹⁰を離れんが為の故に乞士と言う。四邪命と言うは、一に下口食とは、湯藥を合和し、果実を種植し、所得の利養を為し、已りて自ら身に供う。名づけて下口食と為す。二に仰口食とは、星宿¹¹を仰ぎ、吉凶を占相し、所得の利養を為し、以て自ら身に供う。名づけて仰口食と為す。三に方口食とは、詔曲¹²・両口¹³・巧説¹⁴・多端¹⁴を為し、(高基本・上 卷三四丁左) 国の為に使命し、以て利養を得て、自ら身に供う。方口食と名づく。四に維口食とは、誦咒して龍を禁じ、鳥を縛す。維口食と名づく。此の四種の邪を離れ、活命を求むるが故に乞士と名づく。

破惡と言うは、智慧の劍を擣^ふいて煩惱の賊を殺す。故に破惡と名づく。斯れに三義を具するが故に比丘と名づく。比丘と言うは、¹⁵道を処々に慕い、常に宝錫を持し、僧の肅々として明珠を護るが如くなるに依り、食を乞いて門を巡り、寒暑を侵して物を利す。灰を披^{かぶ}り、服を攘^{みだ}し、霜雪を履んで以て衆生を度す。皆な能く魔軍を降伏し、外道を摧折す。所以^{ゆえ}に果を殺賊と名づけ、因を怖魔と号す。応供¹⁶の声は十方を震わし、度人の名は三界に流る。解脱の床にして同じく坐し、涅槃の山に以て齋しく登る。四趣¹⁷を拯いて胞胎を絶ち、五焼¹⁸に背きて寂滅に帰す。斯の三義を具するが^(大正藏本 一〇二) 故に厥^それ比丘と号す。

「千二百五十人¹⁹」¹⁹と言うは、『律』及び『因果經』に説く。仏、^(高基本・上 卷三五丁右)初めて成道して憍陳如・摩訶男・婆提・婆敷・阿濕卑等の五人を度したまう。次に優楼頻螺迦葉の衆、五百人を度し、伽耶迦葉・那提迦葉²²の二衆、各二百五十人を度したまう。次に舍利弗・目乾連²³の二衆、各一百人を度し、次に耶舍

長者子等の二百五十人を度したまう。総合して一千二百五十人有り。²⁴ 大数を挙ぐるが故に唯だ爾所なるのみ。

問う、何ぞ余を標せずして、但だ此等を挙ぐるや。答えて曰く、名徳は高遠にして、常に仏に随うが故なり。皆な先に外道にして、邪を捨て正に帰するが故なり。『毘婆沙論』に云く、四義の故を説く。一に皆な是れ婆羅門種の淨行、出家を以ての故なり。二に皆な是れ上々善來の得戒を以ての故なり。²⁶ 三に皆な是れ大阿羅漢を以ての故なり。四に皆な是れ五師の大門徒を以ての故なり。²⁷ 又、『賢劫定意經』の說に準ずるに、釈迦、初会の説經、一千^(高基本・上 卷三五丁左)二百五十人の比丘、皆な道の証を得たり。²⁸ 經中に且く初会の所度を標するが故に余無し。

經に曰く、「又与諸大菩薩僧万二千人俱^(又、諸大菩薩僧の万二千人と俱なりき)」とは、^(中統藏本 一九二右)述して曰く、此れ即ち第二に菩薩衆を顯す。菩薩と言うは、『仏地論』に依りて云わば、菩とは菩提、薩とは薩埵なり。菩提とは所求の果、薩埵とは能求の人なり。能と所を双べて挙ぐるが故に菩薩と云う。又、『仏地論』に云く、²⁹其れに三種有り。一に菩提、二に薩埵、三に菩提薩埵なり。菩提と言うは、漢に云く、名づけて覺と為す。覺とは是れ所求の果なり。薩埵と言うは、漢に有情と名づく。是れ能く菩提を求むる人なり。菩提薩埵とは、名づけて勇猛と為す。亦た精進と名づく。故に菩提薩埵と言う。若し具足の梵語ならば、応に摩訶菩提薩埵³⁰と言うべし。^(高基本・上 卷三六丁右)摩訶と言うは大なり。菩提と言うは是れ覺なり。薩は是れ一切なり。埵は是れ有情なり。総摂して大覺一切有情と名づく。今は翻訳家の意、省略の故に菩薩と言う。菩薩と

は形を六種の列に垂れて、高く十方に讀じ、彩を二空に集めて五道に度す。是れを以て智力は煩惱を壊し、三毒の雲は消す。慧炬は無明を破し、四魔は殄ことごとく滅す。上方・下方の内、我が大師に歸す。有形・無形の流、咸く皆な伏膺す。功德の名、遠く略言すべし。

問う、何が故に菩薩衆を列するや。³² 答えて曰く、三義有るが故なり。一は阿難の聞經、信すべきを証せんと欲す。阿難、若し小乗の人と共に大乘の法を聞かば、未だ信すべきに足らず。今、菩薩と与に同じく聞きて信ずべし。二は仏、小乗人の圍繞を為すも、其の徳、未だ重からず。大乘人の翼從せば、仏徳も方に尊し。三は是れ大乘經を顯さんと欲す。声聞を以て、^{高基本・上巻三六丁左}位は初めに菩薩衆無きも、觀音・大勢・普賢・文殊等を上首と為すなり。此れ則ち第二の菩薩衆を顯し竟んぬ。

第三に諸天衆を顯すとは、日照三藏の本を案ずるに、忉利・梵摩・善吒・梵魔有りて上首と為す。此れ則ち広略同じからず、有無相似す。上來、六段不同有りと雖も、総じて証信序を明かし竟んぬ。此れより已下は發起序なり。

【① 教起因縁分 二、發起序】

經に曰く、「爾時三十三天於善法堂會有一天子名曰善住（爾の時に三十三天の善法堂會に於て）」^{（爾の時に三十三天の善法堂會に於て）}とは、述して曰く、第二の發起序なり。其の文勢を詳らかにせば、大節兩段なり。第一は善住の請、第二は帝釈の請なり。「爾時三十三天（爾の時に三十三天）」已下、「云何令我得免斯苦（云何が我をして斯の苦を免るることを得しめんや）」に至るは、是れ善住の請なり。「爾

時帝釈聞(高基本・上巻三七丁右)是語已甚大驚愕(爾の時に帝釈、善住天子の語を聞き已て、甚だ大いに驚愕し)「已下、「具如上説(具には上に説くが如し)」に至るは、是れ帝釈の請なり。

今は先ず善住の請を明かし、後に帝釈の請を明かす。善住の請と言う中、十段の文有り。第一は標処顕名(処を標して名を顯す)、第二は上天遊戲(上天は遊戲す)、第三は受諸快樂(諸の快樂を受く)、第四は空声告期(空声は期を告ぐ)、第五は示所生界(所生の界を示す)、第六は正顯受身(正しく受身を顯す)、第七は善住驚怖(善住は驚怖す)、第八は疾往帝釈(疾く帝釈に往く)、第九は重述前言(重ねて前言を述ぶ)、第十は希垂救済(救済を垂れんことを希う)なり。

此れ則ち第一に標処顕名(処を標して名を顯す)とは、其れに三意有り。一は標天、二は示処、三は顯名なり。初に標天と言うは、『俱舎』『樓炭』³⁶等の經に依りて之を述ぶれば、其れ三十三天とは、須弥山の頂に住す。其の山は大海の中心、金輪³⁷の上に在り。高さ十六万踰蹻那、海に入るは八万、水より出るも亦た然なり。四宝の所成にして北・東・南・西、金・銀・吠琉璃³⁹・(正統藏本一九二左)頗胝迦⁴⁰なり。威(高基本・上巻三七丁左)徳の光色、瞻部洲⁴¹に顕わる。空は吠琉璃色と作す。

復た七金山有りて七重に圍繞す。一二の山は皆な水に入り、八万踰蹻那なり。下は金輪に拠り、上は地際に踰ゆ。其の第一の金山は海より出て高さ四万踰蹻那、第二の金山は海より出て高さ二万、第三の金山は海より出て一万、第四の金山の金山は海より出て高さ五千、第五の金山は海より出て

高さ二千五百、第六の金山は海より出て高さ一千二百五十踰躡那、第七の金山は海より出て高さ六百二十五踰躡那等なり。一一の山間に皆な小海有り。其の金山の頂に金剛樹有り。並びに夜刃神有りて止住す。

金山の外に香醉山⁴³有り。『楼炭経』に云く、香山の高さは五百由旬なりと。⁴⁴『立世阿毘曇論』に云く、七種の畜生王有り、中に於て止住すと云云。⁴⁵『俱舍論』に云く、⁴⁶（高基本・上）香山の南に無熱惱池有り。池の南に大雪山⁴⁷有りと。『楼炭経』に云く、雪山は二十五由旬有りと。⁴⁸雪山の南に九重の黒山有り。一一の間に無量の地獄有り。

九重の黒山⁴⁹の南は、名づけて南閻浮提と為す。山の西は西瞿陀尼⁵⁰と名づけ、山の北は鬱單越⁵¹と名づけ、山の東は東弗婆提⁵²と名づく。

其れ須弥山とは、『俱舍論』に云く、高さ十六万踰躡那、四宝の所成なり。東面は白、南面は吠琉璃、西面は頗胝迦、北面は黄金なり。皆な宝の色を逐て、形、空に現ず。所以に南閻浮提、吠琉璃色と作すと。⁵³『楼炭経』に云く、其の山の四面に各おの大海有り。一一の大海中に各おの一大龍宮有り。其の龍に具さに四生有り、卵・湿・胎・化なり。大海の外、金山の側に各おの一樹有り。樹は俱梨睺⁵⁴と名づく。高さ四千里、枝葉扶疏⁵⁵にして^{（高基本・上）}（卷三八丁左）一千里を蔭得す。東枝に卵生の金翅鳥⁵⁶の王宮有り。七宝の所成なり。毎に東枝より下りて大海中に入り、卵生の龍を取りて之を食らう。俱梨睺樹の南枝の上に湿生⁵⁷の金翅鳥の王宮有り。亦た七宝を以ての所成なり。南枝より下りて大海中に入り、卵・湿の二生の龍を取りて之

を食らう。俱梨睺樹の西枝に胎生の金翅鳥の王宮有り。亦た七宝の所成なり。西枝より下りて大海中に入り、卵・湿・胎の三生の龍を取りて之を食らう。俱梨睺樹の北枝に化生の金翅鳥の王宮有り。亦た七宝を以ての所成なり。北枝より下りて大海中に入り、卵・湿・胎・化の四生の龍を取りて之を食らう。唯だ十二大龍王有りて、金翅鳥王の所食を被らずと。⁵⁷

『俱舍論』に云く、其の山に四の層級有り。(大正藏本 一〇三三) 一一の層級、相い去ること万踰躡那なり。第一

層の上に堅手金剛山有りて(高基本・上 卷三九七) 住し、第二層の上に持鬘金剛山有りて住し、第三層の上に恒嬌金

剛山有りて住し、第四層の上に四天王宮有ることを明かすと。『俱舍論』に云く、東面に提頭頼吒天王

宮有⁵⁹り、南面に毘楼勒叉天王宮有⁶⁰り、西面に毘楼博叉天王宮有⁶¹り、北面に毘沙門天王宮有⁶²りと。『楼炭經』

に云く、其の四大天王宮城、各々、皆な七宝所成の七重の城壁、七重の行樹を以てす。其の城の四面に

各々、(正統藏本 一九三七) 皆な宝池有り。黄金の所成なりと。⁶⁴

『俱舍論』に云く、身長五百尺、寿命五百年なり。四大王天より上、はる 廻かに高きこと四万踰躡にして

須弥頂に至る。縦広は八万踰躡那、其の地は坦然にして黄金の所成なり。百一の雜宝をもて之を瑩飾す

ること兜羅綿⁶⁵の如く、足に随いて高下す。中に大城有り、名づけて善見と曰う。其の城の壁、(高基本・上 卷三九五)

七宝の所成なりと。⁶⁶『楼炭經』に云く、金壁銀門、銀壁金門なり。其の城の四面、面広は二千五百踰躡那、

周匝は高さ一踰躡那なり。此の城の中に大殿有り、名づけて殊絶と曰う。種種の妙宝を以て莊嚴を具足するが故に殊絶殿と名づく。其の殿の四面、面広は二百五十踰躡那、周匝は一千踰躡那、高さ一踰躡

那半なり。即ち是れ帝釈所居の殿なり。其の城の四面、外に各おの一苑有り。苑の辺に池有り。各おの妙池と曰う。縦広は二千踰蹠那なり。是れ諸天遊戲の処なり。苑の外、東北に樹有り、名づけて円生と曰う。高さ百踰蹠那にして五十踰蹠那を蔭う。盤は五踰蹠那なり。若し風無き時、周遍すること五十踰蹠那なりと。⁶⁸

問うて曰く、「樹は五十踰蹠那を蔭えば、云何が能く百踰蹠那を動かすや。答えて曰く、若し風に順じて動ずる時、即ち（高基本・上
卷四〇丁右）百踰蹠那を得。若し風無き時、只だ五十踰蹠那に遍ずるのみ。何を以ての故に、当樹の下と為るが故に。此れ即ち第一の標天なり。

示処と言うは、即ち是れ善法堂会なり。善法堂は、此の城の外、西南の角に堂有るを名づけて善法と曰う。諸天は此に於て互いに衆生善惡の事を論ずることを為すが故なり。故に善法堂と名づく。諸天は毎月十五日、中に於て互いに一切衆生の如法、不如法の事を論ず。若し善を造ることを聞かば、諸天は歡喜して即ち言く、「我等、天衆は漸漸に熾盛して、修羅は減少す」と。若し衆生の惡を造らば、諸天は愁苦して即ち言く、「天衆は減少して、修羅は増長す」と。⁶⁹『提謂經』に云く、「二年の中の三覆八按、⁷⁰毎月の六奏には六齋を為すなり」と。⁷³『智度論』に云く、月の八日には四天王・太子の下り、十四日には四天王の下り、十五日には帝釈の自ら下り、二十三日には（高基本・上
卷四〇丁左）太子の下り、二十九日には四天王の下り、三十日には帝釈の自ら下る。各各の諸鬼神は、罪福を抄録して天曹に上奏す。天帝、三十三天善法堂に於て内參議と与に互いに如法、不如法の事を論ず。若し福を作せば、名は福録に入り、精進

の土と為さば、増寿の益を算う。（かぞ）各おの善神に勅して之を擁護せしむ。若し罪を作さば、名は四寶（し けつ）の下に入り、地獄の蔵に付き、算えて寿命を減ず。諸悪鬼、常に其の便を求む。此れ即ち示処なり。

顕名と言うは、即ち是れ一天子有り、名づけて善住と曰う。即ち此の天内、是れ一の天数なり。帝釈所中の四方各八にして三十二天有り。『俱舎論』に云く、此の天の身長は半俱盧舍、（75）即ち一千尺なりと。（76）『楼炭経』に曰く、此の天、白色なりと。（77）『俱舎論』に云く、寿命は千歳なり。人間の一百年は、彼の天の一日一夜なり。還て三十日を以て一月と為す。十二（高基本・上 卷四二丁右）月をもて一年と為す。是の如き歳数日月にして、寿命一千歳なりと。（78）中品の十善を修めて、即ち其の中に生ず。（79）

（中統藏本 一九三左）経に曰く、「与諸大天遊於園觀又与大天受勝尊貴与諸天女前後圍繞歡喜遊戲（諸の大天と与に園觀に遊を受け、諸の天女の前後圍繞すると与に歡喜遊戲す）」とは、述して曰く、第二の大天遊戲（大天は遊戲す）なり。『楼炭経』に云く、此れ善見大城の城外、四面に各おの一園有り。城東は鹿悪苑と名づけ、城南は衆車苑と名づけ、城西は雜林苑、城北は戲林苑なり。城の四面に於て此の四苑有りと。（80）

城東の鹿悪苑と言うは、中に於て鬪戰（81）の身、即ち鹿大なるが故に鹿悪苑と名づく。七宝を以ての所成なり。苑中に樹有り、香樹・衣樹・瓔珞樹・宝器樹・樂樹・飯食樹と名づく。若し香を須（もと）むる時、樹下に之を索めば、即ち（高基本・上 卷四二丁左）意に随いて多少を得。若し瓔珞を須むるに、瓔珞樹下に向かい之を索めば、即ち得ること前に準ず。若し宝器を須むるに、宝器樹下に至り之を索めば、即ち得ること前に準ず。若

て命は將に尽きんと欲す」⁸⁷とは、述して曰く、第四の空声告期（空声は期を告ぐ）なり。文中に二意有り。初は定時、後は告限なり。

（高基本・上 卷四三丁左）定時と言うは、即ち此の日の初夜分に於てなり。告限とは、却て後七日にして命、將に尽きんと欲するなり。問うて曰く、此の天、自ら光明有りて日月に藉らざるに、云何が經に初夜分の時と云うや。答えて曰く、此の天、当に光明有りて昼夜に異無く、日月を要せざるべし。但だ華開き鳥鳴くを以て昼と為し、華合し鳥靜なるを以て夜と為す。初夜分の時と云うは、即ち是れ華合し鳥靜なる時なり。

告期というは、即ち是れ却て後七日に命、將に尽きんと欲するなり。問うて曰く、諸天、死を欲するに、何んが相貌有りや。答えて曰く、其れ兩種有り。一には小の五衰相現じ、二には（高基本・上 卷四三丁右）大の五衰相現ず。小の五衰相と言うは、『俱』（大正藏本 一〇二三）舎論』に云く、「一には衣服は皆な非愛（正統藏本 一九四右）の声を出す。二には身光は味劣す。三には水滴は身を沾す。四には情は一境に滯る。五には眼睛は瞬動するなり。若し此の小の五衰相現ずとも、未だ必ず定んで死せず。若し大の五衰相現ぜば、必ず当に定んで死すべし」⁸⁸と。大の五衰相とは、『大因果經』に曰く、「一には頭上の華は萎む。二には腋下の汗は出づ。三には臭氣は身に入る。四には本座を樂します。五には眼睛は瞬動す」⁸⁹と。此の相現する時、必ず定んで當に死ぬべし。此の經に文無しと雖も、義に準ずるに有るに合せり。応に更に之を詳らかにすべし。

經に曰く、「命終之後生贍部洲（命終の後、贍部洲に生じ）」とは、述して曰く、第五の示所生界（所生の界を示す）なり。

贍部洲と言うは、『俱舍論』に依りて云く、「須弥山の南に在り。山を度えて香醉山有り。香醉山の南に大雪山有り。雪山の北、香山の南に無熱惱池有り。池の側に林有り、贍部90と曰う。其の樹は高大にして、其の果は甘美なり。此の林に依るが故なり。故に贍部洲と名づく91」と。

『楼炭經』に云く、「須弥山の南は、南閼浮提と名づく。山の西は、西瞿耶尼と名づく。山の北は、（高基本・上卷四三丁左）北鬱單越と名づく。山の東は、東弗婆提と名づく。南閼浮提と言うは、広長二十八万里にして、上は闊ひろく下は狭し。六万の山陵、五百の大河有り。人寿は一百二十歳なり。五戒を持つ者は、即ち人中に生ずることを得。其の身長は三肘、或いは四肘なり。初時は長命、劫末は極短にして下は十歳に至る。西瞿耶尼と言うは、広長三十二万里にして、形は正円の如し。受命は二百五十歳なり。下下品の十善を修して、其の中に生ずることを得。身長は十六肘なり。鬱單越と言うは、広長四十万里にして、地は正方なり。寿命は千歳なり。下上品の十善を修して、其の中に生ずることを得。身長は三十三肘なり。東弗婆提と言うは、広長三十六万里にして、其の地は半月形の如し。寿命は五百歳なり。下中品の十善を修して、其の中に生ずることを得。身長は八肘なり。此の贍部洲は、即ち是れ四天下の（高基本・上卷四四丁右）一數なりと。92

經に曰く、「受七返畜生身即受地獄苦從地獄出希得生人身生於貧賤處於母胎即無兩目（七返畜生の身を受く。即ち地獄の苦を受く。地獄

より出でて希に人身に生ずることを得とも貧賤に生じ、母胎に処すとも即ち兩目無し」とは、述して曰く、第六の正顯受身（正しく受身を顯す）なり。文中に四有り。初に畜生を受く。第二に地獄の苦を受く。第三に人身を受く。第四に貧賤に生じ、胎に処すとも兩目無きなり。若し広く因縁を説かんと欲せば、婆羅門有りて、善住の過去の因中、母に於て瞋を起して報を得たりと述ぶ。別に抄記するが如し。⁹³

經に曰く、「爾時善住天子聞此声已即大驚怖身毛皆豎愁憂不樂（爾の時に善住天子、此の声を聞き已て即ち大いに驚怖し、身毛は皆な豎ち、愁憂して樂しからず）」とは、述して曰く、第七の善住驚怖（善住は驚怖す）なり。

經に曰く、「速疾往詣天帝釈所悲啼号哭惶怖無計頂礼（高基本・上）帝釈二足尊已（速疾に天帝釈の所に往詣して、悲啼号哭して惶怖するも計無し。帝釈二足尊を頂礼し已りて）」とは、述して曰く、第八の疾往帝釈（疾く帝釈に往く）なり。

經に曰く、「白帝釈言聽我所説我与諸天女共相圍繞受諸快（正統藏本）樂聞有言善住天子却後七日命將欲尽命終之後生瞻部洲七返受畜生身受七身已即墮諸地獄從地獄出希得人身生貧賤家而無兩目（帝釈に白して言終の後、瞻部洲に生じて七返畜生の身を受く。七身を受け已らば、即ち諸の地獄に墮す。地獄より出でて希に人身を得とも、貧賤の家に生じて兩目無し。命）」とは、述して曰く、第九の重述前言（重ねて前言を述ぶ）なり。

經に曰く、「云何令我得免斯苦（云何が我をして斯の苦を免るることを得せしめんや）」とは、述して曰く、第十の希垂救済（救済を垂れんことを希う）なり。

上來、十段の不同有りと雖も、総じて是れ第一に善住天子、世尊の説を請う。此れより已下、即ち是

れ天帝釈、世尊の説を請うなり。

(高基本・上
卷四五丁右)

經に曰く、「爾時帝釈聞善住天子語已甚大驚愕(爾の時に帝釈は、善住天子の語を聞き已りて、甚だ大いに驚愕して)」とは、述して曰く、

第二の帝釈の請なり。此の天帝釈の請に十段の經文有り。第一に聞之驚愕(之を聞きて驚愕す)、第二に思受何身(何んが身を受くと思う)、第三に入定諦觀(定に入り諦かに觀ず)、第四に具知所受(具さに受くる所を知る)、第五に痛傷心腑(心腑を痛傷す)、第六に師仰如来(師は如来を仰ぐ)、第七に帝釈持供(帝釈は供を持す)、第八に詣聖恭敬(聖に詣で恭敬す)、第九に広獻仏前(広く仏前に獻ず)、第十に具聞七返(具さに七返を聞く)なり。此れ即ち第一に聞之驚愕(之を聞きて驚愕す)なり。

經に曰く、「即自思惟此善住天子受何七返惡道之身(即ち自ら思惟す、此の善住天子は、何んが七返惡道の身を受けんや)」とは、述して曰く、第二の思受何身(何んが身を受くと思う)なり。

經に曰く、「爾時帝釈須臾靜住入定諦觀(爾の時に帝釈は須臾に靜住し、定に入りて諦かに觀ず)」とは、述して曰く、第三の入定諦觀(定に入り諦かに觀ず)なり。

(高基本・上
卷四五丁左)

經に曰く、「即見善住天子当受七返惡道之身所謂猪狗野干獼猴蟒蛇鳥鷲等身食諸穢惡不淨之物(即ち見るに、善住天子、当に七返惡道の身を受く。所謂る猪・狗・野干・獼猴・蟒蛇・鳥・鷲等の身にして諸の穢惡・不淨の物を食らうべし)」とは、述して曰く、第四の具知所受(具さに受くる所を知る)なり。帝釈、即ち見るに、善住天子、当に七返の身を受く、所謂る猪・狗・野干・獼猴・

蟒蛇・鳥・鷲等の身にして諸の穢惡・不淨の物を食うべし。猪身と言うは、『大智度論』に云く、「邪僞慢に由るが故なり。故に猪身を受く」と。⁹⁵『提謂經』に云く、痴にして虚しく施の四事供養を受信するに由るが故なり。故に猪身を受く」と。⁹⁶又、『法華經』に曰く、斯の經を謗するに由るが故なり。故に猪・狗・野干等の身を受く」と。⁹⁷又、云く、酒を飲み、痴業を造るに由るが故に猪身を受く」と。⁹⁸『提謂經』に云く、惡口・慳貪の故なり。故に猪身を受く。物の為に慳貪すと。野干身と言うは、『大智度論』に云く、「善人を輕慢するに由るが故に野干身を受く」と。¹⁰⁰又、『提謂經』に^(高基本・上 卷四六・七)云く、奸猾の語に由るが故に野干身を受く」と。郭朴の云く、野干の形、狐に大なり。又、能く樹に縁ると。^(のぼ 102)獼猴身と言うは、『大智論』に云く、「輕躁短促に由るが故に獼猴身を受く」と。¹⁰⁴『提謂經』に云く、遊戲放逸に由るが故に獼猴身を受く」と。¹⁰⁵又、蟒蛇身とは、亦た『大智度論』に云く、「瞋恚多きに由るが故なり。故に毒蛇等の身を受く」と。¹⁰⁷『爾雅』の云く、「蟒は王蛇なり」と。¹⁰⁸郭朴の云く、「蛇の大なるが故なり。故に名づけて王と為す」と。¹¹⁰問うて曰く、何に由りてか此等の畜生身に毛羽有りや。答えて曰く、『大智度論』に云く、觸樂を受くるに由るが故に身に毛羽を生ずと。¹¹¹良に善住は、先に是の業を造らんが為の故なり。故に斯の苦報を受く。

(正統藏本 一九五右) 經に曰く、「爾時帝釈觀見善住天子当墮七返惡道之身拯助苦惱痛割於心諦思無計^(爾の時に帝釈、善住天子の當に七返惡道の身に墮すべしと觀見して、苦惱を拯助せんと心を痛割して諦かに思ふも計無し)」とは、述して曰く、痛傷心腑(心腑を痛傷す)なり。

經に曰く、「何所歸依唯有如來心正等覺令其善住得免斯苦^(何れの所にか歸依せん。唯だ如來心正等覺有りて、其の善住をして斯の苦を免ることを得せしめたまふ)」とは、

述して曰く、第六の師仰如来（師は如来を仰ぐ）なり。

經に曰く、「爾時帝釈即於此日初夜分時以種種華鬘塗香末香以妙天衣莊嚴執持（爾の時に帝釈、即ち此の日の初夜分に於て、時に種種の華鬘・塗香・末

香を以て、妙天衣を以て莊嚴執持し）

」とは、述して曰く、第七の帝釈持供（帝釈は供を持す）とは、其れ五種有り。一は華鬘、

二は塗香、三は末香、四は天衣、五は瓔珞なり。華鬘と言うは、謂く西国に縋を以て華を貫く、之を名

づけて鬘と為す。塗香・末香とは、此の天の中、其の香樹有り。樹上に香を取り、随意に供養す。天衣

と言うは、『大智度論』に云く、此の天の中に、其の衣樹有り。天、若し衣を須める時、樹下に衣を取

り（高基本・上、卷四七上右）、之を受用す。此の衣は白色にして由ほ薄（大正藏本一〇二四）。氷の如し。文字有ること無しと。¹¹²『楼炭

經』に云く、「此の忉利天の衣は、重六銖半なり」と。瓔珞と言うは、『楼炭經』に云く、此の天の中に

瓔珞樹有り。意に随いて之を取り、衆苦有ること無しと。¹¹⁴

經に曰く、「往詣誓多林園於世尊所到已頂礼仏足右邊七匝（誓多林園に往詣し、世尊の所に於て到り已りて仏足を頂礼し七匝に右邊す）」とは、述して曰

く、第八の詣聖恭敬（聖に詣で恭敬す）なり。七匝と言うは、『提謂經』に曰く、七覺分に応ずと。¹¹⁵

經に曰く、「即於仏前広大供養（即ち仏前に於て廣大に供養し）」とは、述して曰く第九の広献仏前（広く仏前に献ず）なり。

經に曰く、「仏前胡跪而白仏言世尊善住天子云何当受七返畜生惡道之身具如上説（仏前に胡跪して仏に白して言く、世尊よ、善住天子、云何か

当に七返畜生惡道の身を受くべきやと。具さには上に説くが如し）」とは（高基本・上、卷四七上左）、述して曰く、第十の具聞七返（具さに七返を聞く）なり。

上來、多文の不同有りと雖も、総じて是れ第一の教起因縁分を竟んぬ。

注

1 『大藏經全解説大事典』(二〇一六年、雄山閣) 八一〇頁参照。本注釈は、道貳(七三四〜七四〇)の手による『御注金剛般若波羅蜜經宣演』(大正蔵二七三三番)と同文が多く、異本とも見なされてきたが、問題となる「千二百五十人」の注釈については『金剛般若經疏』のみである。

2 法宗疏(『大正蔵』三九卷一〇二頁上段)と『金剛般若經疏』(同八五卷一五二頁中段)の対応箇所を比較すると、法宗疏の二五三字に対して、『金剛般若經疏』は三五文字と少し短い、使用される術語等も含めてよく一致している。

3 拙論「法宗述『仏頂尊勝陀羅尼經教述義記』訳注(三)」(二〇二四年『川崎大師教学研究所紀要』九)注64参照。長耳三蔵に帰せられる時の解釈は、完全に一致するわけではないが、両疏は要素的によく対応している。

4 『仏頂最勝陀羅尼經』(大正蔵九六九番)の訳出は、彦棕の經序(『大正蔵經』一九卷三五頁上段)によれば、永淳元年(六八二)に地婆訶羅が、杜行顚訳(大正蔵九六八番)をもとに改訳したものだという。他訳に比して内容的にも不審と思われる要素は見当たらない。

5 『最勝仏頂陀羅尼淨除業障呪經』(大正蔵九七〇番)の訳出について、先行研究では、志靜の經序と関連づけて垂拱三年(六八七)等と見なされるが、拙論「尊勝陀羅尼成立考」(二〇〇七年、加藤精一博士古稀記念論文集『真言密教と日本文化』下巻)二三七頁で記述したように、六九五〜七三〇年の間に成立し、地婆訶羅に仮託された可能性もある。内容的にも本經中には、善住天子の過去世における因縁(『大正蔵經』一九卷三五八頁中段〜三五九頁上段)や、陀羅尼を聞く功德として阿頼耶識を踏まえた解説がなされる(同三六〇頁下段)等、他訳に類を見ない記述が多く見受けられ不審である。

果たして実際に地婆訶羅が訳出したのかどうかは不明であるが、『続古今訳経図紀』(『大正蔵經』五五卷三八頁下段)、『開元釈教録』(同五五卷五六頁上段等)に記載されることから七三〇年以前に存在していたことは確かといえよう。

6 法宗述『仏頂尊勝陀羅尼經教述義記』(『大正蔵經』三九卷一〇二三頁上段)。

- 7 地婆訶羅『最勝仏頂陀羅尼淨除業障呪經』（『大正藏經』一九卷三五八頁中段～三五九頁上段）。
- 8 摩訶とは、梵語 mahā の音写語で、「大きな」「偉大な」を意味する。
- 9 大正藏本では「中」のみであるが、高基本では本文の傍らに「文ノ字ヲ入テ見ヨ」とあり、卍統藏本でも冠注に「中の上に」に「文」字有るべし」と記されている。ここでの「文中」とは、仏陀波利訳の經文の中にの意である。
- 10 四邪命とは、四邪命食（四食）の略称。乞食によらずに得た四種の食事のことであり、比丘には相応しくないとされた。ここでは下口食（調葉や農耕によって得た食事）、仰口食（占星術を行う利益によって得た食事）、方口食（言葉巧みに権力におもねり得た食事）、維口食（呪術を行う利益によって得た食事）としている。
- 11 星宿とは、星の宿りのことであり、二十八宿・十二宮・七曜等がある。
- 12 諂曲とは、自分の心を曲げて相手にへつらい、おもねること。
- 13 両口とは両舌と同義で、兩人に異なる言葉告げて、その間を引き離し争わせること。離間語ともいう。
- 14 多端とは、細々した雑務に従事して忙しいこと。
- 15 卍統藏本および大正藏本では「言比丘言」とあるが、高基本の「言比丘者」を採用して訓読した。
- 16 応供とは、人天の供養を受けるに相応しい聖者のこと。阿羅漢（arhan）ともいう。
- 17 四趣とは、六趣のうち人・天を除いた、地獄・餓鬼・畜生・修羅のこと。四惡道ともいう。
- 18 五焼とは、殺生・偷盜・邪淫・妄語・飲酒（五惡）を犯した報いとして、来世、惡道において火に焼かれるような苦しみ味わうことをいう。
- 19 「千二百五十人」より以後、問答を含めて「標初会所度故無余也」に至るまで、『金剛般若經疏』（大正藏二七四一番…『大正藏經』八五卷一五二頁中段）の文と全く一致している。『大藏經全解説大事典』八一〇頁によれば、『金剛般若經疏』は、敦煌出土の Pelliot. 111310 番を原本とするものであり、その著者は不明であるという。
- 20 憍陳如・摩訶男・婆提・婆敷・阿濕卑等の五人とは、釈尊が苦行を伴にし、後に初轉法輪の対告衆となった五比丘のこと

である。それぞれの梵名は Ajita Kaundinya・Mahanāman・Bhadra・Vaspa・Āsvakin である。

21 優楼頻螺迦葉とは、梵語 Uṣṭivakāśyapa の音写語。優楼頻螺迦葉は、伽耶迦葉・那提迦葉と兄弟であり、あわせて三迦葉と称せられる。兄弟ともに火神を拝む事火外道であり、あわせて千人ほどの弟子がいたとされる。

22 伽耶迦葉・那提迦葉とは、梵語 Nādikāśyapa と Gayakāśyapa の音写語。仏伝資料の多くでは弟子の数について、長兄・優楼頻螺迦葉には五百人、次兄・伽耶迦葉には三百人、三兄・那提迦葉には二百人とするが、ここでは次兄・三兄の弟子について各二百五十人としている。

23 舍利弗・目乾連とは、梵語 Śāriputra と Maudgalyāyana の音写語。ともに懷疑論者サンジャヤの弟子であったが、後に釈尊の教団に帰入して有力な弟子となり、舍利弗は智慧第一、目乾連は神通第一と称された。仏伝資料の多くでは、舍利弗・目乾連は二百五十名の仲間を連れて釈尊に帰依したとするが、ここでは各百名、あわせて二百名としている。

24 高基本・毘統藏本・大正藏本ではともに「那舍」とするが、伝写における誤りと判断されたため、「耶舍」に改めた。耶舍長者子とは、梵語 Yasa の音写語。バーラーナシーの長者の子で、釈尊の教えを聞いて出家した。後にその仲間である四名、さらに五十名もまた出家し、それぞれの家族が信者として出家者の生活を支えるようになり、教団(サンガ)が成立したとされる。

25 釈尊の教団の「一千二百五十人」の内訳について、迦葉三兄弟は長男五百人・次男二百五十人・三男二百五十人、次に舍利弗百人・目乾連百人、最後に那舍長者子の関係として二百五十人を挙げ、合計すると一千四百五十人超となり一致しない。

26 善来とは、仏が「よく来た」と述べて、出家を志す者を歓迎することであり、得戒とは、仏より戒を受け、戒体を発得することである。

27 五師の大門徒についてはよく分らないが、文脈から判断すると、釈尊の弟子のうち外道から仏道に転じ、かつ数多くの弟子を有した優楼頻螺迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉、舍利弗・目乾連の五師を指すものと考えられる。

28 竺法護訳『賢劫經』（『大正藏經』一四卷五〇頁下段）。『賢劫定意經』とは本經の異名。

29 親光等造・玄奘訳『仏地經論』（『大正藏經』二六卷三〇〇頁上段）の取意か。

30 摩訶菩提薩埵とは、梵語 mahabodhisattva の音写語であり、偉大な菩薩（菩提を求める有情）を意味する。

31 六種の列については断定できないが、文脈的には「六趣」と解される。すなわち菩薩は、迷える衆生の救済のために、身形を六趣の世界に垂迹するとの意か。

32 菩薩衆を仏集会に加える理由三点を挙げるとは、古藏撰『法華義疏』（大正藏一七二一番・『大正藏經』三四卷四六一頁上段）の文とよく一致している。

33 法宗疏の注釈対象である仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』（大正藏九六七番）では、声聞衆と菩薩衆のみである。しかし、その異訳本である地婆訶羅（梵語 Dhṛakara : 日照）訳『仏頂最勝陀羅尼經』（大正藏九六九番）には、「復有万梵天王善吒天等」（『大正藏經』一九卷三五五頁中段）、また同訳『最勝仏頂陀羅尼淨除業障呪經』（大正藏九七〇番）でも、「復有万梵天王。梵摩天王。善見天王而為上首。与其梵衆而俱会坐」（同三五七頁下段）と詳しい天衆の記述が見られるが、法宗疏の記載とは必ずしも一致しない。

34 忉利・梵摩・善吒・梵魔とは、仏頂尊勝陀羅尼が説かれる集会に居合わせた天衆を代表する天子名と考えられる。忉利とは、梵語 Trāyastriṃśa の音写語であり、欲界・六欲天の第二、三十三天の天子と推定される。他の梵摩・善吒・梵魔は、いずれの天界に属する天子かは不詳である。高基は、地婆訶羅訳を踏まえて、漢字の区切りについて再考を試み、「意の云く、梵魔の魔は摩か。善は善見天、吒は阿迦尼吒の吒か」等と述べている。

35 高基本では割注に「請字恐脱乎」と記し、また『大正藏經』も注に「住十（請）？」と記すことから「請」の字を補い、訓読本文を「善住の請」と改めた。

36 三十三天（梵語 Trāyastriṃśa・忉利天）の所在について、『阿毘達磨俱舍論』には、「三十三天は迷盧の頂に住す」（『大正藏經』二九卷五九頁下段）とあり、また法立・法炬訳『大樓炭經』にも、「忉利天は須弥山上に在り」（『大正藏經』一卷二七七頁中段）

とある。

37 金輪 (kañcanamandala) とは、須弥山世界を支える三種の大円輪（三輪）の一つで、風輪・水輪の上にある。金輪と地輪を別として四輪とする場合もある。

38 踰躑那とは、梵語 yojana の音写語で、「由旬」と音写されることも多い。距離の単位であり、牛車あるいは帝軍が一日に進む行程とされる。その具体的な距離については、十六里・三十里・四十里等の諸説がある。

39 吠琉璃とは、梵語 vaidurya の音写語で、青く美しい宝石の瑠璃を指す。

40 頗胝迦とは、梵語 sphatika の音写語で、水晶を指す。

41 瞻部洲とは、梵語 jambu の音写語と dvīpa（砂洲・島）の意識語から成る。閻浮提とも音写する。須弥山の南方にある人間が住む台形の大陸であり、ジャンプ樹 (jambu) が多く生えることが名の由来である。

42 夜叉神とは、夜叉神のことである。夜叉とは、梵語 yaksa の音写語で、森林や樹木に棲む神霊であり、人々に危害を与える一方、様々な恩寵を与えると考えられた。

43 香醉山とは、南瞻部洲の中心にある山であり、香山あるいは崑崙山とも呼ばれる。この山の南には無熱惱池がある。

44 法立・法炬訳『大楼炭經』には、須弥山等の大きさに関わる記述が見られるが（『大正藏經』一卷二七七頁上段）、香山（香醉山）に関する言及は見当たらない。

牧達玄「大楼炭經の同本異訳を巡る二三の問題」（一九七八年『印度学仏教学研究』第二六卷二号）等によれば、『楼炭經』周辺には、『長阿含第四分世記經』『起世因本經』等の異訳があり、また『楼炭經』としても一巻本・五巻本・六巻本・八巻本等が存在した可能性が指摘されている。以下、法宗疏では多く『楼炭經』を引用するが、他の経論の引用に比して、現存する経文との差異が著しいことから、『大正藏經』所収の『大楼炭經』とは異なるものを参照・引用した可能性がある。45 真諦訳『立世阿毘曇論』（大正蔵一六四四番）には、一致する記述が見られない。しかし、高基本の附録二二丁右では、漏闡耆利象王品第五の象王に関する記述（『大正藏經』三二卷一七八頁下段）、あるいは云何品第二十の「一切禽獸及水羅刹」

(同一九九頁下段) 以下の文と推定している。

46 無熱惱池とは、香醉山の南、大雪山の北にある大池であり、阿耨達池 (anavatapta) とも呼ばれる。ガンジス等の四大河は、この池を本源として流れ出るという。

47 世親造・玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』(『大正藏經』二九卷五八頁上段) からの抄出。

48 法立・法炬訳『大樓炭經』には、前の香山と同様、雪山に関する記述も見当たらない。

49 高基本・正統蔵本・大正蔵本いずれも、「九重黒山南名為南閻浮提」であり、素直に訓読すれば、「九重の黒山の南は、名づけて南閻浮提と為す」となる。しかし、直前に「雪山の南に九重の黒山有り」と記されることから、その解釈は適當ではなく、「須弥山の南」に閻浮提があると解されるべきでる。あるいは、やや変則的な訓読であるが「九重の黒山ある南は」と解するべきか。

50 西瞿陀尼とは、梵語 [apara]godanīya の音写語であり、須弥山の西方にあるとされた円形の大陸。西牛貨洲と同じ。

51 鬱單越とは、梵語 uttarakuru の音写語であり、須弥山の北方にあるとされた方形の大陸。北俱盧洲と同じ。

52 東弗婆提とは、梵語 pūrvavidha の音写語であり、須弥山の東方にあるとされた半円形の大陸。東勝身洲と同じ。

53 世親造・玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』(『大正藏經』二九卷五七頁中段) に類文あり。

54 俱梨睺については、法立・法炬訳『大樓炭經』では「駒利睺」(『大正藏經』一卷二七八頁上段)、また『長阿含經』では、「究

羅睺摩羅」(同一卷二二七頁中段) とある。

55 枝葉扶疏とは、木の枝葉が四方に広がること。

56 金翅鳥とは、インド神話に登場する神鳥ガルダ (garuḍa: 迦楼羅) のことで、金色のように光り輝くことが名の由来である。

57 法立・法炬訳『大樓炭經』の龍鳥品(『大正藏經』一卷二八八頁上段～二八九頁上段)の取意か。同箇所には龍に卵生・水生・胎生・化生の四種がいることが説かれる。また金翅鳥についても同様に、駒利睺樹の西に卵生、東に水生、南に胎生、北に化生という四種がいることが説かれるが、捕食する龍の内容については相違がある。

58 世親造・玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』(『大正藏經』二九卷五九頁中～下段)の取意。須弥山は堅手(Kurutapāni)・持鬘(Malahara)・恒嬌(Sadamatta)・四天王衆天という四層から成り、前三層には藥叉神(yakṣa)がおり、それらの上層に四天王および眷属が居止すると説かれる。

59 提頭頼吒天王宮とは、梵語 Dhitaraṣṭra の音写語で、東方を守護する持国天を指す。

60 毘楼勒叉天王宮とは、梵語 Virūḍhaka の音写語で、南方を守護する増長天を指す。

61 毘楼博叉天王宮とは、梵語 Virūpakṣa の音写語で、西方を守護する広目天を指す。

62 毘沙門天王宮とは、梵語 Vaiśravaṇa の音写語で、北方を守護する多聞天を指す。

63 世親造・玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』において、須弥山の第四層に「四大天王」が居止することが説かれるが(『大正藏經』一卷二八八頁上段～二八九頁上段)、四天王を個別に四方に配当する記述は見当たらない。

64 法立・法炬訳『大樓炭經』の四天王品(『大正藏經』一卷二九三頁中段～二九四頁上段)の取意か。

65 兜羅綿とは、梵語 pūṣa の音写語と pūṣa (綿)の意訳語からなる。草木(一説に白楊樹)から採れる軽くて柔らかい綿のこと。

66 世親造・玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』(『大正藏經』二九卷五九頁下段)に類文がある。須弥山頂には、善見という名の大城があり、大帝釈が居するという。その地は真金からできているが、綿のように柔らかく様々な宝で飾られているとされる。

67 高基本・卍統藏本・大正藏本ともに、「蔭五千踰躡那」となっているが、大正藏本の注に「千〓十?」とあるように、「十」が妥当と判断されたため本文のごとく改めた。

68 法立・法炬訳『大樓炭經』の忉利天品(『大正藏經』一卷二九四頁上段～二九五頁中段)の取意か。同箇所には須弥山頂にある忉利天と、帝釈天が居住する城等の様子が記述されるが、語彙や内容には相違がある。

69 法立・法炬訳『大樓炭經』の忉利天品には、衆生の善惡の事を聞いた帝釈天の言葉として、「善を作さざる故に諸天を減損し、阿須倫種を増益す」「世間人を用て善を作すこと多きが故に諸天を増益し、阿須倫を減損す」(『大正藏經』一卷二九八頁上段～中段)と同趣旨が説かれている。

70 三覆とは、正月・五月・九月の三長齋月のことである。『牧田諦亮著作集』第一卷（疑經研究、二〇一四年、臨川書店）一九六頁、二二四頁参照。

71 八校とは、立春・春分・立夏・夏至・立秋・立冬・冬至のことである。天地諸神陰陽交代するが故に、また八王日の名がある。『牧田諦亮著作集』第一卷（疑經研究）一九六頁、二二四頁参照。

72 六齋日とは、毎月の八日、十四日、十五日、二十四日、二十九日、三十日のことである。『牧田諦亮著作集』第一卷（疑經研究）一九六頁、二二四頁参照。

73 『提謂經』（提謂波利經）とは、すでに拙論「法崇述『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』訳注（一）」（二〇二二年『川崎大師教学研究』七）で触れたように、仏法による民衆教化のために中国で作られた疑偽經典である。本經は、『大正藏經』中には収蔵されていないが、道世撰『法苑珠林』（大正藏二二二番）には、「又提謂經云」として「三覆八校一月六奏」（『大正藏經』五三卷九三二頁下段）の文が引かれている。また、牧田諦亮氏は、「敦煌本提謂經の研究（上）——安世高訳分別善惡所起經との類似」（一九六八年『仏教大学大学院研究紀要』一）において本經の翻刻を行っているが、その中に「是三長齋是爲三覆、八校者、八王日是也」（一四七頁）という類文が確認される。

74 四寶とは、四つの穴の意と解される。

75 俱盧舎とは、梵語 *krosa* の音写語。距離の単位であり、牛の鳴き声が聞こえる範囲とされるが、その具体的な距離については一里・十里等の諸説がある。

76 世親造・玄奘訳『阿毘達磨俱舎論』には、三十三天の身量に関する直接の記述は見られないが、「欲界六天の最下の身量は、一俱盧舎の四分の一なり。是の如く後後一分を増して、第六天に至りて身は一俱盧舎半なり」（『大正藏經』二九卷六二頁上段）と関連する内容が説かれている。

77 法立・法炬訳『大樓炭經』中には、忉利天（三十三天）の天身を白色とする記載は見当たらない。

78 世親造・玄奘訳『阿毘達磨俱舎論』に類文があり、「上の五欲天は漸く俱に増倍す。謂く人の百歳を第二天の一昼一夜と爲

し、此の昼夜に乗じて月及び年を成じ、彼の寿は千歳なり」(『大正藏經』二九卷六一頁中段)とある。

79 十善とは、身に関わる不殺生・不偷盜・不邪淫、口に関わる不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語、意に関わる不貪欲・不瞋恚・不邪見のことである。

80 法立・法炬訳『大樓炭經』の忉利天品(『大正藏經』一卷二九四頁下段～二九五頁中段)の取意か。同箇所には、帝釈天の殿舎の四方にある四園への言及が見られるが、園の呼称について東は鹿堅園、南は樂画園、東(北の誤りか)は憤乱園、西は歌舞園となっており相違する。

81 大正藏本では「門」、高基本・卍統藏本では「闕」であるが、文脈上、後者を採用した。

82 高基本・卍統藏本・大正藏本ともに「樹下」のみであるが、前後の文脈からすると「香樹下」の表記がより相応しい。

83 卍統藏本・大正藏本では「所」、高基本では「為」であるが、文法上、後者を採用した。

84 大正藏本では「宝」、高基本・卍統藏本では「嚴」であるが、文脈上、後者を採用した。

85 高基本では、本文「衆車苑」の冠注として「衆車經無」と記しており、卍統藏本・大正藏本も継承している。

86 高基本では、本文「馬車」の冠注として「馬車樓炭五四日天帝釈坐千匹馬車」と記しており、卍統藏本・大正藏本も継承している。

87 法立・法炬訳『大樓炭經』の忉利天品(『大正藏經』一卷二九四頁下段)には、四園中に樂樹が生えるとの記載があり、統きでは(同二九七頁下段)樂樹より音樂鼓を取り出す旨が説かれるが表現はやや相違する。

88 世親造・玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』(『大正藏經』二九卷五六頁下段)からの抄出。

89 求那跋陀羅訳『過去現在因果經』(『大正藏經』三卷六二三頁中段)に類文が見られるが、「一者菩薩眼現瞬動。二者頭上花萎。三者衣受塵垢。四者腋下汗出。五者不樂本座」というように五衰の順番および表記が相違している。大の五衰相については、様々な経論に説かれるが、法宗疏に完全に一致するものは見られない。

90 瞻部とは、梵語 jambu の音写語で、フトモモ科に属する樹木の名である(学名 *Eugenia jambolana*、和名ムラサキフトモ

モ)。七月頃、サクランボよりも少し大きい紫黒色、楕円形の果実をつけ、生食が可能であるという。

91 世親造・玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』（『大正藏經』二九卷五八頁上段）からの抄出。

92 法立・法炬訳『大樓炭經』の忉利天品（『大正藏經』一卷二九六頁中段～下段）の取意か。同箇所では、四洲の人の身長や寿命等が説かれるが、その数値には相違が見られる。

93 地婆訶羅訳『最勝仏頂陀羅尼淨除業障呪經』では、善住天子が七返畜生の身を受けることになった原因として過去の因縁譚を明かしている（『大正藏經』二九卷五八頁上段）。善住天子は、過去世においてバーラーナシーの婆羅門の元に生まれしたが、父は早逝したため、母が独りで養育したという。その暮らしは大変貧しく、食事も滞りがちで、飢渴した子は母に対して嗔心を起こし、「母は畜生にすら及ばない」等と悪言を吐いたとされる。

94 前の十段に分けた箇所では「具知所受」であったが、ここでは高基本・正統藏本・大正藏本いずれも「其知所受」とし相違している。訓読にあたり、前者にならない「具知所受」に改めた。

95 龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』には、「邪慢縁の故に驢・猪・駱駝の中に受生す」（『大正藏經』二五卷一七五頁上段）という類文が見られる。『大智度論』の続きでは、様々な煩惱や悪心に対応させる形で、種々の畜生身が列記されている。

96 ここでは『提謂經』より四文が連続して引用されるが、いずれの文も牧田諦亮氏による翻刻等には未収録である。拙論「法崇述『仏頂尊勝陀羅尼經教述義記』訳注（一）（二〇二三年『川崎大師教学研究所紀要』七）参照。

97 鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』（『大正藏經』九卷一五頁下段）からの抄出。『法華經』あるいは法華の行人を誹謗する者は、その報いとして死後、まず阿鼻地獄に生まれ、次いで畜生界において狗および野干の身を受けると説かれる。

98 『妙法蓮華經』に類文は見当たらない。

99 野干身とは、ジャッカル (sigala) の類であったが、中国・日本では狐の類と解された。

100 龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』には、「善人を輕慢するが故に鶏・狗・野干等の身を受く」（『大正藏經』二五卷一七五頁上段）という類文が見られる。

- 101 郭朴(二七六、三二四)とは、またの名を郭璞という。東晋代に活躍した文人であり、『爾雅』『山海經』等に注を施したことで知られる。
- 102 郭璞注『爾雅』中に野干(野犴)に関する記載は見当たらなかった。
- 103 輕躁とは落ち着きがなく、輕はずみに騒ぐこと。短促とは慌ただしいこと。
- 104 龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』には、「慳貪嫉妬・輕躁短促の故に獼猴・獼猴・熊羆の形を受く」(『大正藏經』二五卷一七五頁上段)という類文が見られる。
- 105 獼猴とは大猿のこと。
- 106 蟒蛇とは大蛇のこと。
- 107 龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』には、「瞋恚偏多にして毒蛇・蝮蝎・蚊蜂・百足・含毒の虫を受く」(『大正藏經』二五卷一七五頁上段)という類文が見られる。
- 108 『爾雅』とは、紀元前二世紀頃に成立したと目される撰者不詳の字書。漢字を意味により十九部に分けて釈し、全三卷より成る。
- 109 『続修四庫全書』一八五(經部・小学類)二四頁上段(郭璞注『爾雅』下卷・釈魚第十六)。
- 110 『続修四庫全書』一八五(經部・小学類)二四頁上段(郭璞注『爾雅』下卷「釈魚第十六」)。同書の「蟒王蛇」という本文について、「蟒蛇最大者故曰王蟒」という割注を付している。
- 111 龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』(『大正藏經』二五卷一七五頁上段)の取意か。
- 112 龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』中には、「欲界の天の衣は、樹辺より生じて縷無く織無し。譬えば薄氷の如し」(『大正藏經』二五卷三一〇頁中段)と類似する記載が見られるが、欲界全体の天衣の記載となっている。
- 113 『大樓炭經』の忉利天品中に、「忉利天人の本身長は四十里、衣の広は八十里、長は四十里、衣の重は七銖半なり」(『大正藏經』一卷二九六頁中段)という類似した記載が見られるが、衣の重量が一銖分相違している。

114 法立・法炬訳『大樓炭経』の忉利天品（『大正藏経』二卷二九四頁下段）には、四園中に瓔珞樹が生えるとの記載があり、

続きでは（同二九七頁下段）には瓔珞樹より、瓔珞を取り出す旨のことが説かれるが表現はやや相違する。

115 『提謂経』からの引用とされるが、牧田諦亮氏による翻刻等には未収録である。法崇疏の続きでは、再度、「提謂経曰。行道七匠者。以応七觉分度七世父母也」（『大正藏経』三九卷一〇三七頁中段）という文が引用される。

〈キーワード〉法崇、『仏頂尊勝陀羅尼経教迹義記』、『大樓炭経』、『金剛般若経疏』、『須弥山、忉利天（三十三天）、地婆訶羅（日照）